

第 48 回 日本言語文化学会 日本言語文化学会 2014 年 6 月 28 日(土)

第 1 分科会報告 滑川 恵理子

(司会：平野 トンプソン 美恵子、記録：滑川 恵理子)

第 1 分科会では、以下 3 件の発表が行われました。

◆「学習者の考える現行の会話授業の問題点と期待される会話授業—中国東北部 4 大学の日本語専攻学習者への半構造化インタビュー調査から—」

中国の日本語専攻の学生が多くの文法項目を学びながらそれを使いこなせず日本語で話すことに苦手意識をもっているのは会話授業に関連があるのではないかという問題意識から、中国東北部 4 大学の日本語専攻学生を対象に会話授業の問題点を探った研究である。半構造化インタビューのデータを、KJ 法を用いて質的に分析した結果、学生の主体的参加が少ない教師主導による授業の問題点が明らかになった。それに対し、4 大学の日本語会話授業の内容は同じなのか、教科書は何を使っているのか、半構造化インタビューの質問項目は何か等、調査に関する質疑応答が行われた。

◆「インドネシア人看護師候補者の援助ニーズ—EPA 応募動機、困難との関連から—」

EPA 協定に基づく看護師の受け入れ枠組みに関し要件と待遇・職務内容のバランスや能力と仕事内容の不適合等の問題がある中、候補者の実態や援助ニーズの詳細が明らかになっていないという問題意識から、インドネシア人看護師候補者を対象に応募動機・困難・援助ニーズとそれらの関連性を調べた研究である。質問紙調査をもとに統計的分析を行った結果、「応募動機」および「困難」によって必要な援助ニーズ（「学習環境整備」「試験対策」「情報提供」等）が異なることが明らかになり、候補者への一次的サービス（情報提供等）・二次的サービス（学習支援等）の充実が示唆された。それに対し、学習時間と現在の職務内容についての理解の関係に関する質問、看護師経験をもつ候補者に対する援助サービスについての確認、示唆に含まれていなかった危機介入等の三次的援助サービスの方がむしろ不足しているのではないかという意見が出された。

◆「中学国語の教科学習支援に関わった日系南米人の当事者性獲得のプロセス」

言語少数派の子どもたちが学校に通えない、通えたとしても言語や文化の異なりのため教育内容にアクセスしにくい現状は、言語少数派の人々が社会的経済的に周辺化させられているからではないかという問題意識から、中学生に対する国語教科学習支援への参加を通じて周辺化された状況から当事者性を獲得したとみられる地域在住の日系南米人の事例を検討した研究である。半構造化インタビューのデータを M-GTA の手法で質的に分析した結果、2 名の対象者は、言語や制度、情報獲得の面で周辺化されていたが、学習支援への参加を通じて主体性と責任感をもつようになり、また子どもに対しても将来の展望を見いだすようになったことから、当事者性を獲得していったことが示唆された。それに対し、学習支援のより詳しい内容の説明を求める質問、また、M-GTA のカテゴリー図に示された概念名からは「周辺化」を直接イメージするのは難しく今後のさらなる詳細な分析が期待されるという意見が出された。

第2分科会報告 黄 美蘭

(司会：池田広子、記録：黄美蘭)

第2分科会では、以下2件の発表が行なわれました。

◆「待遇の観点から見た新たな文体の分類の試み—言語表現の有する「相手目当て性」を中心に—」

本研究では、スピーチレベルとそのシフトを記述・分析するための基礎的な枠組みを提示する。ここでは、ある言語表現が相手に向けられたものであることを意味する「相手目当て性」という概念を導入し、従来とは異なる文体の分類の可能性を検討した。これまでのスピーチレベルに関する先行研究では、「文体＝スピーチレベル」という捉え方が多く見られる。しかし、そもそもスピーチレベルとは、発話によって表される表現主体の場面に対する待遇意識の度合いであり、加えてそれは固定的なものではなく、言語的・状況的要因によって実現される指標的機能の一つである。そのため、これまでの捉え方には限界があると指摘できる。そこで、本研究では、原則的に「相手目当て性」を有する表現のみがスピーチレベルを表すことができることを明確にし、同時に「相手目当て性」を有する表現は、「近接化」、もしくは「遠隔化」の機能によって分類できることを示す。このような分類は、様々な言語表現が表し得る異なるスピーチレベルに対する検討を可能にする足場になることを示唆する。フロアから、本研究で新たに試みた枠組みの精緻性・的確性及び今後の検証について質問があった。また、本研究で用いた終助詞の観点と先行研究で積み上げてきた終助詞の観点との結びつきについての質問、日本語教育についての示唆についての質問があった。

◆「学習者主体の継続的課外活動デザインの提案—社会文化能力の育成を目指して—」

本発表は、学習者主体を活動理念とした継続的課外活動型日本語教育の実践報告である。本実践では、留学生を対象に、来日後の日本語学習期間において、地域社会での文化交流活動を1年間に1回、縦断的に実践することで、「いま、ここ」におけるインターアクション能力を学習者自身が確認することを目的とした。そして実践後の振り返りの気づきから内省を行い、その後の言語運用力を学習者自身が主体的且つ段階的に再構築することによりコミュニケーション能力のさらなる育成を目指す。ワークシート・インタビュー・記述から分析し考察の結果、活動継続の過程において、学習者は内省後、主体的に自身の課題に取り組み、言語運用力を養成することでインターアクション能力が培われ、異なる文化背景をもった他者との協働継続からは、受容することまた理解することを学び、社会文化生活における自身のインターアクション能力の向上を実感し、そのことが社会生活における自信に繋がること明らかになった。フロアから、「ものづくり」の詳細について、「実践ワークシート」の目的についての質問があった。また、本研究で用いた「学習者の認知」、「分析概念」に関しての具体的な分析方法について質問があった。さらに、客観的な分析方法を用いることによって、分析結果の一般化ができ、より質の高い論文になるのではないかとコメントがあった。



水谷信子先生 講演会の様子



口頭発表の様子



ポスター発表の様子